

# モリソン先生の精神科診断講座

Diagnosis Made Easier

James Morrison 【原著】

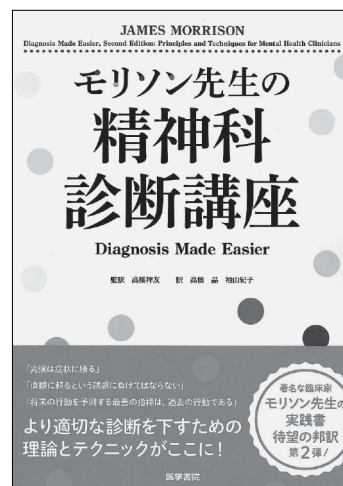
高橋祥友 【監訳】

高橋 晶, 袖山紀子 【訳】

評者

石丸昌彦

放送大学教授・生活と福祉コース



掛け値なしに面白く、しかもためになる本というものはそう多くないが、本書はその稀な1冊であること請け合いである。自分の志した精神医学は、こんなふうに豊かで魅力的であったのだと思ひ出させてくれる。

多言を弄することによってかえって薄っぺらく見せてしまうのは本意ではないが、あえて言語化するなら以下のようなことである。

本書は三部構成で、順に「診断の基礎」「診断の構成要素」「診断技法の適用」から成る。

第Ⅰ部「診断の基礎」は、臨床的思考の筋道を丹念に示す。症状・兆候・症候論といった基礎概念が明確な定義とともに順次導入され、ディシジョンツリーへと組み立てられていく。同時に「兆候は症状に勝る」「直観に頼るといった誘惑に負けてはならない」といった金言・箴言が次々と示され、それらが頁ごとにふんだんに提示される症例にことよせて解説されることで、生き生き躍動しながら頭に入ってくる。方法論的基礎を叩き込む第Ⅰ部である。

第Ⅱ部「診断の構成要素」は原題が“building blocks”とあるとおり、生育歴・家族歴・身体疾患・

精神機能評価といった情報のブロックから、いかに患者の全体像を再構成するかを論じる。そのような内容ゆえに症例は米国社会の諸相を広く点描し、読み物としても相当に豊かなものになっている。イメージを立体化する第Ⅱ部である。

第Ⅲ部「診断技法の適用」は全体のほぼ6割を占め、Ⅰ・Ⅱ部で提示された思考法のおびただしい実践例が紙面を埋めている。豊穡の第Ⅲ部である。

意想外の指摘もあれば同感共鳴する主張もありで、大部ながら飽きることがない。例えばDSMで見かけ上齊一化された「うつ病」に実際は多くの原因があることを喝破し、その鑑別診断について説き進める11章などは圧巻で、臨床知とはこういうものかと感嘆する。強いて難を言うなら内容が豊かすぎること、十分消化して批判的に検討することができずには、二読三読を要するであろう。

教科書づくりを得意とする米国人の本領発揮の1冊であるが、むしろ翻訳者らの貢献が大きい。格調を保ちつつこなれた日本語に落とし込んだ力量は見事であり、英語のみならず米国文化に通じた

人々の労作であることがうかがわれる。

1点だけ、13章でdisorganizedをことさら「解体された」と受け身に訳しているが、では解体した犯人は誰(何)かと妙な方向に連想を動かす点でかえって拙くないだろうか。それよりも、以前から「解体」の語に疑問があった。Disorganizedは「ちぐはぐ」「てんでんばらばら」というほどの意味であり、ビルや自動車の粉碎のごとき「解体」は明らかに不適切で、患者への配慮をも欠いている。どうせこの語に注目するなら、せつかくの機会に訳者らの手で別の語を編み出してほしかったと、ファンの心理でお伝えしておく。

監訳者があとがきで述べているとおり、姉妹編『精神科初回面接』(医学書院、2015年)と合わせてじっくり読み込むことをすべての精神科医に勧めたい。DSMの副作用を予防するためにも一押しの好著である。

B5・頁288 2016年04月  
定価：本体4,500円＋税  
[ISBN978-4-260-02490-7]  
医学書院刊